コミュニケーション力を基盤とした「生きる力」を育む総合的な学習のカリキュラム開発

―「生きる力」を育む総合的な学習を目指して（２）―

國原　信太郎・吉藤　誠・石原　一繁

Curriculum Development of Period for Integrated Studies That Fosters "The Zest for Living" Based on Communication Skills
― Aiming for Integrated Studies That Fosters ”The Zest for Living”(2)―

Shintaro KUNIHARA, Makoto YOSHIFUJI, Kazushige ISHIHARA

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第３号　（2021年１月）

Journal of Educational Research
Center for Educational Career Enhancement

No.3（January 2021）

コミュニケーション力を基盤とした「生きる力」を育む総合的な学習のカリキュラム開発
―「生きる力」を育む総合的な学習を目指して（２）―

國原　信太郎・吉藤　誠・石原　一繁
（京都教育大学附属京都小中学校）

Curriculum Development of Period for Integrated Studies That Fosters "The Zest for Living" Based on Communication Skills
－ Aiming for Integrated Studies That Fosters ” The Zest for Living”（2）－

Shintaro KUNIHARA・Makoto YOSHIFUJI・Kazushige ISHIHARA

2020 年 9 月 25 日受理

抄録：本実践研究は，コミュニケーション力を基盤とした総合的な学習を通じて，次年度より完全実施される学習指導要領が求める「生きる力」を育むためのカリキュラムを開発するものである。そのために，本校がこれまで推進してきたエネルギー教育と，国際理解教育を大きな柱として新しいカリキュラムを開発した。このカリキュラムでは，現代社会が抱える諸課題に対し，生徒たちが主体的に情報を収集し，自分の意見や考えと，他者の意見や考えとを比較しながら論理的に思考，分析していくことにより，「生きる力」の育成を図る。学習を進めていく上で生じた課題に対し，各教科で育まれた資質・能力を働かせ，コミュニケーション力を駆使しながら，協働的に解決していく本カリキュラムは，生徒たちに思考力・判断力・表現力を育み，「生きる力」を育成することに有効であることが分かった。

キーワード：総合的な学習　生きる力　資質・能力　コンピテンシー　コミュニケーション力　カリキュラム

Ⅰ．はじめに

2021年度より完全実施される中学校学習指導要領では，「生きる力」がより具体化され，教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を，ア「何を理解しているか，何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得)」，イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」，ウ「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか（学びを人生や社会にいかそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」の三つを大きな視点として整理している。これは，グローバル化や情報化が人間の予測を超えて加速度的に進み，アイディアなどの知識そのものや人材を巡る国際競争がますます過熱する社会状況の中で，その競争を生き抜いていくための力を生徒に育成しなければならないためである。

このような力を育成するため，学校教育の諸活動において，生じた課題や問題に主体的に向き合わせ，多様な他者と協働しながら課題や問題の解決法を探らせていかねばならない。種々ある学校における教育活動の中でも，とりわけ，総合的な学習は，自ら課題を発見し，考え，学び，協働して問題をよりよく解決する資質や能力を育てることなどをねらいとする。これは，思考力・判断力・表現力等が求められるこれからの社会においてますます重要な役割を担っていくのではないかと考えられる。また，総合的な学習は，学校が

地域や学校，生徒の実態等に応じて，教科等の枠を超えた横断的な学習が行われ，「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」というプロセスで発展的な探究学習が行われるため，実社会・実生活において活用できる資質・能力を育むことも可能である。

このように大きな可能性を秘める総合的な学習を，OECD のアンドレアス・シュライヒャー教育・スキル局長は，新聞紙上（2017，8 月 11 日付読売新聞朝刊）において，「日本の学力向上は，総合学習の成果だと考えると説明がつく。」と述べ，総合的な学習を学力向上の鍵とした。事実，総合的な学習は，国内外の学力調査の好成績につながり，さらには学習姿勢改善に大きく貢献し，OECD をはじめ国際的に高く評価されることになった。そのような成果もあってか，総合的な学習が始まった当初は批判的であった保護者の数は大きく減少し，半数以上の保護者は，総合的な学習の時間を削減すべきでないと考えるようにまでなった。（「学校教育に対する保護者の意識調査」 朝日新聞・ベネッセ教育研究開発センター，2013 より）

しかしながら，総合的な学習が，次期学習指導要領上でも「探究的な学習として質的な改善が図られてきているものの，未だに特定の教科等の知識や技能の習得を図る学習活動が行われていたり，体育祭の準備などと混同された学習活動が行われていたりするなどの事例が見られるとの指摘もある。」と述べられ，総合的な学習として相応しくない学習が行われているという実態もある。

そこで，本稿では，次期学習指導要領が目指す「生きる力」を育むため，知識及び技能，思考力・判断力・表現力等，学びに向かう力・人間性等といった資質・能力の育成のために開発した総合的な学習のカリキュラムと指導の実際を紹介し，その成果と課題を報告する。

Ⅱ．総合的な学習のカリキュラムと指導の実際

1 対象学年

今回紹介する総合的な学習のカリキュラムは，中学１年・中学２年対象のものである。2018 年度まで，本校では縦割りで総合的な学習を行っていたが，2019 年度より新しいカリキュラム開発のために単独学年での総合的な学習を実施している。縦割りでの総合的な学習とは異なり，同じ知識レベルで，同じ立場の生徒同士が，ともに話し合い，考え合う中で，自らの考えを主張したり，他者と協調したりしながら学習していくことで，コミュニケーション力を基盤とした思考力・判断力・表現力といった資質・能力が大きく育まれ，それが「生きる力」につながるのではないかと考えた。ただし，縦割りでの活動を一切廃したというわけではない。本校のこれまでの縦割りでの総合的な学習が，資質・能力の育成に大きな効果があったことは，國原(2020)で実証されているため，中学１年・中学２年でそれぞれの成果を交流させるという縦割り活動を残すことにした。「子どもの社会性が育つ異年齢の交流活動」（国立教育政策研究所，2011）には，異学年の交流活動を行うことで「他の人とうまく関わりを持てることを高く評価できる子どもが増え，併せて学校への適応感も高まる。」と述べられている。すなわち，異学年での交流活動は，子どもの社会性を育むことにもつながるのである。これは，「生きる力」にも直結するものであり，大きな教育的効果が期待できる。よって，今回開発した総合的な学習のカリキュラムにも，一部であるが異学年の交流活動を残すことにした。

2 本カリキュラム開発の背景とその目的

これからの社会は，新しい知識，情報，技術が，政治・経済・文化をはじめとするあらゆる領域での活動の基

盤として飛躍的に重要性を増す知識基盤化が進む。さらに，交通手段の発達や情報化が進む中で，国際交流が進展し，国際的な相互依存関係はますます深まってくる。そのような状況の下で，あらゆる領域において，世界的規模で競争が激化し，その結果，種々の摩擦が生じる結果となっている。また，地球環境問題，エネルギー問題，人口問題，難民問題など地球規模の問題が深刻化しつつあり，これらの問題の解決に当たっては，国際的な協調が不可欠となっている。こうした国際関係の緊密化や複雑化などを背景にして，国際化はさらに進展し，今後ますます加速していくものと思われる。このように国際化が急速に進展する中で，絶えず国際社会に生きているという広い視野を持つとともに，国を越えて相互に理解し合うことは，ますます重要な課題となりつつある。

そこで，中学１年・中学２年の総合的な学習の時間では，アイディアなどの知識そのものや人材を巡る国際競争がどんどん過熱し，産業構造の変化も急速に進んでいるこの社会において，その競争の中を生き抜いていくための資質・能力を育むことを目指す。具体的には，本校がこれまで力を入れて取り組んできた「タイ国交流」と「エネルギー教育」を大きな柱として，「国際理解」，「異文化理解」を探究する“グローバル”と，「エネルギー問題」，「環境問題」について探究する“サイエンス”に領域を分け，生徒たちは興味・関心のある領域に潜む課題や問題などについて，自ら問いを立て探究していく。各領域における探究活動では，社会が抱える様々な問題や課題に積極的に向き合い，様々な情報を見極めることで正しい知識を習得し，同学年の仲間と協働しながら，その解決法を探っていく。

3 各領域の目的

(1) グローバル

・広い視野を持ち，異文化を理解するとともに，これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図る。

・国際理解のためにも，自国の文化について探究し，日本人として，また，個人としての自己の確立を図る。

・相手の立場を尊重しつつ，自分の考えや意思を表現できるコミュニケーション能力の育成を図る。

(2) サイエンス

・持続可能な社会の構築を目指して，エネルギーや環境に関する理解を深めるとともに，課題意識を醸成し，その解決に向けて適切に判断し行動できる資質や能力を養う。

・エネルギーや環境に関する課題や問題を探究することで，エネルギーや環境に関する理解を深める。

・相手の立場を尊重しつつ，自分の考えや意思を表現できるコミュニケーション能力の育成を図る。

4 活動内容の概要

主体的な取り組みを通じ，自ら学び，自ら考える力の育成，さらには協働学習を進めることでコミュニケーション力を基盤とした「生きる力」の育成を目指した探究活動を行う。生徒には，“グローバル”か“サイエンス”かどちらの領域で探究活動を進めたいかを事前調査し，その結果を受けて１グループ男女混合４名をベースとして班編成を行う。探究活動では生徒の意欲が何よりも大切になるため，生徒自身の領域選択を尊重し，人数調整のために領域変更を促すことは一切しないように配慮した。グループ確定後は，そのグループのメンバーで探究テーマについて話し合い，各々で新聞や雑誌，研究誌などを持ち寄り，テーマに沿った探究活動を進めていく。探究テーマはグループでの話し合いの中で決定していくが，どのようなテーマを立てればよいかイメージしやすいようにするため，事前に指導者側から簡単なテーマ例を示した（次ページ表１）。なお，探究活動では，

インターネットの使用に大きく制限をかけることにした。これは，「異学年協働学習による総合的な学習の実践」（國原,2020）で述べているが，インターネットでの調べ学習に制限をかけないと，ネット上にある情報を中心に探究活動が進んでしまうというこれまでの実践の反省を踏まえての対応である。よって，2019 年度からは，インターネットを主として探究活動を行わせるのではなく，新聞や雑誌，研究誌などをしっかりと読ませ，そこから根拠ある情報を収集させ，インターネットを補助的に活用させることにした。探究活動の成果は，模造紙にまとめさせ，それをまずは学年でポスターセッションにより発表させる。学年内でのポスターセッション後は，中学１年・中学２年が混じってのポスターセッションを行い，最終は本校の文化祭で小学６年生～中学３年生を交え，大規模なポスターセッションを行わせた。

表１　2019 年度提示した探究テーマ例（國原作成）

領　域	探　究　テ　ー　マ　例
グローバル	タイに関連すること・世界の運輸交通・食糧供給と農業・戦争と平和・紛争地域の復興・世界の保健医療・開発途上国の問題・貧困問題・教育問題　など
サイエンス	震災復興・エネルギー資源のリスクとベネフィット・エネルギーミックス・経済活動とエネルギー消費・エネルギー政策　など

5　働かせたい資質・能力や育みたい態度

(1) 知識・技能

学習課題に関する概念的知識を獲得し，よりよい課題解決のために必要な知識や技能を身に付け，探究的な学習のよさを理解している。

・課題に対して興味関心を持ち，課題の解決に必要な知識や技能を身に付ける。

・課題解決に向けて見通しを持った探究活動を計画し，その解決に向け情報を収集する。

・課題解決のために探究活動が有効であることを理解する。

(2) 思考力・判断力・表現力等

実社会や実生活の中から問いを見出し，探究的な見方や考え方を用いて，自分で課題を立て，情報を集め，整理してまとめ，発表している。

・実社会や実生活の中から問いを見出し，その問いを論理的に捉え，分析する。

・課題に対して主体的に情報を集め，集めた情報を適切に取捨選択し，活用する。

・最終目標に向けて，伝えたいことや説明したいことを整理してまとめ，論理的に表現する。

(3) 学びに向かう力・人間性等

実社会や実生活の中から積極的に問いを見出し，主体的・協働的に課題の解決に取り組み，学習したことを自己の生き方にいかし，積極的に次の課題に取り組もうとしている。

・異なる意見や他者の考えを受け入れ，尊重することで他者との交流を深め，豊かな人間関係を築く。

・グループのメンバーと協力して根気強く，積極的に課題を探究する。

・社会の中に生きる一員として，自分は何ができるのか，何をすべきか考える。

6　2019年度の実践

(1) 指導計画

探究の成果を発表するポスターセッションまで，中学１年が２時間× 5 回，中学２年が２時間× 4 回の時間を取り，探究活動を進めた（表２）。最終のポスターセッションでは，発表班が，作成したポスターを用いな

がらこれまでの探究内容を説明し，その後，質疑に応答した。また，発表する班以外の生徒たちは，発表に関しての考察や感想を記録させた。

表２　2019 年度指導計画（國原作成）

回	内容	活動場所
1	・オリエンテーション（学習の目的・流れを確認） ・グループ顔合わせ（グループリーダ決め，役割分担） ・担当者からの説明（教室担当教員より補足説明） ・探究課題設定	・講堂（研究主任） ・各学級（担任） ・特別教室（学年教員）
2	・探究活動（新聞，雑誌，研究誌など持参）	・各学級（担任）
3	・新聞，雑誌，研究誌などの分析，検討	・特別教室（学年教員）
4	・ポスター作成　　・学年内ポスターセッション（中２のみ）	
5 （中１のみ）	・探究活動 ・学年内ポスターセッション	・各学級（担任） ・特別教室（学年教員）

※時間差が学年で生じた理由は，他の総合的な学習との兼ね合いのため。
※異学年交流のポスターセッションは，本指導計画からは除外している。

(2)探究テーマの実際

実際の探究テーマは，表３の通りである。政治からスポーツ，食品ロスまで幅広い探究テーマが立てられていた。特に，中学２年は，理科や特別授業などで東日本大震災や原発，エネルギーの学習を進めているため，その辺りをテーマにしているグループが多く，また，サイエンスを選択したグループも中学１年より多かった。この結果より，教科で身に付けた知識や技能等を探究テーマに関連付け，学習を進めていることがうかがえる。

表３　2019 年度 探究テーマ一覧(國原作成) ※Ｇはグローバル，Ｓはサイエンス領域を示す。

中１	・政治を変える(G)・永遠の経済成長は『おとぎ話』(G)・発展途上国が抱える問題(G)・虐待を防ぐには(G)・地球温暖化～よりよい未来のために～(G)・中東の核問題について(G)・貿易の未来(G)・食品ロス～いつか０にするために～(G)・日本とつながるアジアにズームイン！(G)・日本とアメリカ～ｔｒａｄｅ　ｒｅｌａｔｉｏｎ～(G)・日米関係の現状～過去から未来に向けて～(G)・激化する米中貿易摩擦(G)　・タイと日本の生活習慣の違い(G)・あなたの思いがシリアを救う～シリアの紛争と支援～(G)・日韓関係について(G)・地球温暖化～全員が知らなければならない～(S)・Ｄｏ　ｙｏｕ　ｋｎｏｗ　Ｆｕｋｕｓｈｉｍａ？(S)・日本を襲う恐怖の目(S)・Ｐｌａｓｔｉｃ　Ｐｌａｎｅｔ　ＥＡＲＴＨ～海洋生物ＳＯＳ！～(S)・寿命と医療～医療の未来について考える～(S)・放射能のゴミどうやって処理すんの！？(S)
中２	・日本の教育それでええん？(G)・僕達は, no-side ここから　kick off(G)・平和とは･･･(G)・世界の子どもたち(G)・本当の「幸せ」って何？～私たちが追い求めるもの～(G)・世界の紛争と各国の対応(G)・STOP 戦争!～持続可能な平和な未来～(G)・消えない戦争とそのわけ(G)・スポーツの壁～なくならない人種差別～(G)・世界の貧富の差(G)・『結』　Our　Heart(S)・原子力～僕らの力を新しい力へ～(S)・震災のその先へ･･･(S)・もしエネルギーが消えたなら･･･(S)・考えるから発信する未来へ！(S)・原発事故の影響～明るい未来への対策～(S)・原子力のこれから～福島に学ぶ～(S)・原子力の必要性～これからの世界を考える～(S)・福島の今～明るい未来を支える活動～(S)・Let's think ！(S)・未来を変える～今，私たちにできること～(S)

(3)指導の実際（探究活動時）

①目標

・実社会における課題や問題を見出し，自ら問いを立て，その解決に向け正しい情報を収集し，整理・分析して，まとめたり表現したりすることができる。

・自らの考えをグループ内で伝え合い，他者の考えも参考にしながら，議論し,分析していくことで，

課題や問題の解決法を探ることができる。

・コミュニケーション力を発揮し，グループでの探究活動を進めていくことができる。

②学習展開例（５０分×２コマ の探究活動）と指導者の動き

ポスターセッションに向け，ポスター作りを行っていく際の学習展開例を紹介する（表４）。この時，指導者は，何かを指導するというわけではなく，導入で生徒たちに残り時数と現段階の進み具合を確認させ，まとめで振り返りをさせるというように，終始ファシリテーター役に徹するように心掛ける。これは，生徒たちに主体性と協働性を育むためである。ただし，ファシリテーターとは言っても，展開時はグループでの探究活動に目を配り，議論が本筋から外れていたり，滞っていたりするグループに適切な支援を行うようにする。また，今回の実践では，新聞や雑誌，研究誌中心の探究活動になるため，その見方や読み方，活用法などの支援やアドバイスも必要があれば行う。活動時には，教室内のパソコン（教室で１台）を補助的に使用することを認めるが，インターネットの情報に頼りすぎないようにその使い方にも指導者は目を配っておく必要がある。こう書くと，ファシリテーターとはいっても指導者の役割は多岐に亘るため，大変そうに見えるが，今回の実践では，１教室に生徒は 12 名～ 16 名という少人数の配置としたため，手厚く生徒の支援を行うことができた。担当教員の受け持ちの生徒数をいかに少なくできるかは，よい探究活動を生み出す環境作りの一つになるといえる。

表４　学習展開例（國原作成）

	生徒の学習活動	指導者の支援及び留意点
導入	・前回活動に対しての振り返りをする。 ・最終目標に向けての計画を確認する。	・前回活動の様子や，提出させた振り返りシートから気付いたこと，考えさせたいことを生徒に伝える。 ・残りの時数を確認させ，最終目標に向けての計画を確認させる。
展開	・それぞれが調べてきたもの，まとめてきたものを検討，分析し，今日の探究計画を共有する。 ・ポスター作成のためにどのような情報が必要か考える。 ・挙がった疑問や課題については，グループで議論し，課題の解決法を探る。 ・ポスターの作成をする。 ・必要な情報を収集し，活用する。 （新聞，雑誌，研究誌，PC の活用）	・各グループの活動を見回り，探究計画についてアドバイスを行う。 ・ポスターの作成状況を確認する。 ・グループで挙がった疑問や課題について，話し合わせ，必要があれば，教員が支援を行う。 ・PC での情報検索に頼りすぎないように目を配ったり，声掛けをしたりする。 ・新聞，雑誌，研究誌の読み方を支援する。
まとめ	・次回までの検討課題を設定する。 ・活動を振り返る。 ・振り返りシートを記入する。 ・振り返りを発表し，考えたことや活動したことを教室内メンバーと共有する。 ・担当教員からの講評を聞く。	・グループで次回までに考えておくこと，調べておくことを考えさせる。（役割分担させる。） ・振り返りシートに，今日の活動，探究の過程を具体的に記入させる。 ・振り返りを発表させ，全体で共有する。 ・次の活動を見据えた講評をする。

③評価方法

・グループでの話し合い活動や，ポスター作りの様子（観察による評価）

・ポスターの制作過程（観察による評価，制作物による評価，振り返りシートによる評価）

・振り返りシートと，全体発表の様子（観察による評価，制作物による評価，振り返りシートによる評価）

7　2020年度の実践

（１）指導計画

ポスターセッションまで，中学１年，中学２年とも２時間×６回の時間を取り，探究活動を進めていく（表5)。なお，本年度はコロナ禍の影響もあり，昨年度より学習開始時期が遅れることになってしまった。

表５　2020 年度指導計画（吉藤作成）

回	内容	活動場所
1	・オリエンテーション（学習の目的・流れを確認） ・グループ顔合わせ（グループリーダ決め，役割分担） ・担当者からの説明（教室担当教員より補足説明） ・探究課題設定	・講堂（研究主任） ・各学級（担任） ・特別教室（学年教員）
2	・探究活動（新聞，雑誌，研究誌など持参）	・各学級（担任） ・特別教室（学年教員）
3	・新聞，雑誌，研究誌などの分析，検討	
4	・ポスター作成	
5	・学年内ポスターセッション	
6	・異学年交流ポスターセッション	・体育館（担当教員全員）

（２）探究テーマ

探究のテーマは，個人が興味のあることを，サイエンス・グローバルの視点から捉え，まず個人で決定する。次に類似したテーマの生徒を３～５人のグループに編成し，グループ内でポスターセッションに向けてテーマを決定させる。

（３）指導の実際（探究活動時）

①目標・評価方法について

昨年度に立てた目標，評価方法を継続する。(2019 年度指導の実際を参照)

②学習展開（５０分×２コマの探究活動）

昨年度のカリキュラムを大きく変更していないため，学習展開を変更することは行わなかった。しかし，昨年度は，それぞれのグループがテーマにあった新聞や本などの記事や情報を収集し，まとめてくるということができていなかった。そのため，総合的な学習の時間が情報収集の時間になり，深い議論ができていないグループがあった。そこで本年度は，毎回の総合的な学習の時間までに，テーマについて個人的に調べ学習を行ったり，グループででた課題について個人で調べたりすることを徹底させることにした。そうすることで，グループで集まったときに議論や課題解決法を探る時間を増やせるようにした。その結果，より深い探究活動が進めることができた。

また，昨年度は活用する新聞や本等の資料を国内のものに限ったため，考える視点や観点が，日本からだけのものになってしまっていた。そのため，探究を進めていく中で，どうしても国内の考え方に偏ってしまうグループが多くなっていた。本年度は，それを防ぐために，海外の新聞を取り寄せ，日本とは違う見方・考え方に触れる機会を作ることにした。さらに外部団体との連携を図ることで，オンラインで現場の声を聴いたり，議論したりできるような機会を作るようにした。

Ⅲ．成果と課題

本校の総合的な学習は，昨年度より新しいカリキュラムを構築し，今年で２年目となる。この２年で若干のマイナーチェンジはあるが，活動の核は，生徒に，“グローバル”・“サイエンス”どちらかの領域を選択させ，それぞれの領域でテーマを設定し，探究活動を進めさせるというものである。その主体的な探究活動を通じ，自ら学び，自ら考える力の育成，さらには協働学習を進めることでコミュニケーション力を基盤とした「生きる力」の育成を目指した実践の成果を４つ紹介したい。

①生徒主体の活動の充実・生徒の探究心の向上

今年度はコロナ禍の影響もあり，総合的な学習の実施が例年よりも遅れてスタートした。しかし，そのような状況下でも，夏休み前に全体の概要をつかませ，個人→グループでの探究活動になることを生徒たちは理解して活動することができた(図 1)。夏休みという長期休暇は，生徒に積極的な調べ学習を促すことが可能であり，そこで視野を広げることができる。また，生徒はその調べ学習を元に，グループ学習では熱心に取り組んでいこうとする意識が見られた。

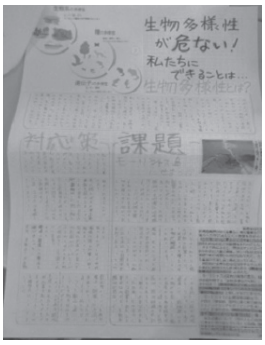

図１　夏休みの個人活動成果物

②生徒同士の縦のつながり（異年齢集団との関わり）の深化

昨年度の実践では，本校の文化祭に当たる行事で中学１年と中学２年がポスターセッションを行い(図 2)，お互いの学年で刺激を得ることができた。また，他学年に発表できたことがよりよい発表法の工夫につなげることができた。さらに，6 年生はポスターセッションに聴衆として参加することができたため，その生徒が今年中学１年になり，探究方法やそのまとめ方，考察方法を総合的な学習にいかすことができていた。これは，縦のつながりや活動が，学びに大きくいかされた結果といえる。今年度はコロナ禍であるが，その効果の大きさを考え，密を避けた上で，異学年でのポスターセッション交流を予定している。この活動を通して，普段の教科学習では実現が難しい，異年齢の聞き手を意識したコミュニケーション力を育むことができた。

図２　ポスターセッションの様子

③学習環境の充実

インターネットの利用を補助的な扱いにしたことで，生徒は本や新聞，インタビュー，取材活動を積極的に行っていき，情報ソースが明らかなものを取捨選択しながら，探究活動に必要な情報を収集することができた(図 3)。一方，そのような情報媒体を使用するには，図書館の蔵書数が少なかったり，新聞をグループすべてに渡せなかったりする問題がある。しかし，本研究の実践においては，昨年度，今年度と本学からのプロジェクトの経費，さらには財団法人言語教育振興財団の助成金を活用することにより，サイエンス・グローバルに関する書籍や，パネルディスカッションの方法に関する書籍を必要分揃えることができた。さらには，英字新聞等も取り寄せることができ，生徒にグローバル的な視野を持たせ，深い探究活動を可能にする環境を整えることができた。

図３　探究活動の様子

今年度末には，新型コロナウイルスの状況にもよるが，サイエンス領域において他校とのオンライン交流を実施する予定にしている。また，グローバル領域では，本校が独自に行っているタイ国との交流において，総合的な学習で学んだ知見を実践的に深めていく。これらの活動を通して，学びを本校の中だけで学んで終わらせるのではなく，より学校外の他者と協働的に学び会うことで，コミュニケーション力を培い，「生きる力」を育成することができたといえる。

④教員同士の連携・学習内容の深い共有

教員同士が活発な議論を通して，よりよい学習プログラムにしようと創意工夫をこらすことができた。生徒たちの現状を適切に捉え，昨年度の初期プログラムを参考にしつつ，今年度の生徒実態に合わせて軌道修正ができたことは，総合的な学習のカリキュラムの洗練につながり，それが生徒の学びの質の向上につながった。また，全教科の教員が，カリキュラムに関して議論できたからこそ，社会や理科教員の専門的な知識・助言をいかして必要書籍を選別することができ，英語教員の国際感覚で英字新聞各社より現在の時勢に合った新聞を選び，生徒に提供することができた。さらに，夏休みの国語科の課題を，総合的な学習におけるテーマとリンクしたものにすることができたり，発表の基本的な方法を国語科で指導したりするなど，総合的な学習への取り組みに向けて，教科横断的な学習を実現することができた。

以上の 4 点が，新しいカリキュラムによる成果といえるが，やはり課題も残った。課題は以下の 2 点である。

①個人・グループによる力量差への対応

人間それぞれ，力量差があるのは否めないことである。総合的な学習となると，教科横断的な力が問われるため，各種課題に取り組むことに困難な生徒もいる。もちろん，そのような生徒の力を補ったり，充実させたりするために，グループ活動を実施したり，教員による適切なサポートが行われたりするのは当然である。しかし，中には探究活動に積極的になれない生徒もおり，そのような生徒に対しての効果的な指導であったり，工夫であったりを，これからも継続的に研究していかなければならないと感じた。

②学習環境を整えていくことの難しさ

生徒の家庭環境，学校や地域によって差が生まれる。特に生徒個人の学力において課題を抱える場合は，総合的な学習においては内容を発展させていくことが難しい。今回は本校では，財団法人言語教育振興財団の助成金を活用することで関連書籍や新聞等必要資料を用意し(図 4)，その課題を支援できる環境を整えることができたが，そのようなことができない場合は，新たな手立てが必要となる。さらに，今年度はコロナ禍のため，総合的な学習に限らずオンラインや情報機器環境の充実が叫ばれた。ポストコロナも見据えて，利便性の高い機器の充実やその利用法も研究していきたいところである。これらも含めて，よりよい学習教材・環境を研究していかなければならないと強く感じた。

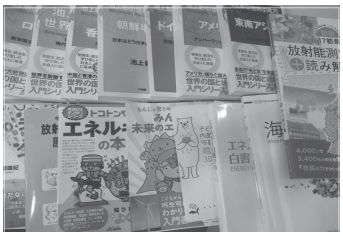

図 4　助成金により用意した書籍の一例

Ⅳ．おわりに

昨年度，「生きる力」を育む総合的な学習を目指し，本校では総合的な学習のカリキュラムの全面改訂を行った。本年度はそのカリキュラムの2年目になるが，現代社会が抱える諸課題に対し，生徒たちが主体的に情報を

収集し，自分の意見や考えと，他者の意見や考えを比較しながら論理的に思考，分析していく活動の様子を見ていると，これからの社会に必要となるコミュニケーション力を基盤とした「生きる力」の育成を図ることができたのではないかといえる。また，学習を進めていく上で生じた課題に対し，各教科で育まれた資質・能力を働かせ，協働的に解決していく活動の様子や成果物（図 5,6）等から，本カリキュラムが思考力・判断力・表現力といったコンピテンシーを育むことに有効であることも分かった。

ただし，実践を進めていくことで，個人・グループによる力量差への対応や，学習環境を整えていくことの難しさといった課題も明らかになった。次年度はその課題を解決していくために，さらなる研究を進め，よりよい総合的な学習のカリキュラムや学習プログラムを生み出したいと考えている。

図 5　探究活動の様子（サイエンス領域）

図 6　探究活動の様子（グローバル領域）

参考文献

1) 児島邦宏・佐野金吾(1997)「中学校 総合的な学習の時間研究の手引」，明治図書出版

2) 国立教育政策研究所(2011)「子どもの社会性が育つ異年齢の交流活動」，国立教育政策研究所生徒指導研究センター

3) 朝日新聞・ベネッセ教育研究開発センター(2013)「学校教育に対する保護者の意識調査」，ベネッセ教育総合研究所

4) 読売新聞(2017)「総合学習学力アップの鍵」，8 月 11 日付朝刊 14 版 11 面

5) 文部科学省(2017)「中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」

6) 國原信太郎(2020)「異学年協働学習による総合的な学習の実践」, 教職キャリア高度化センター教育実践紀要 2 号,pp105-114

付記

・本研究は，本学教育研究・改善プロジェクト経費（2019･2020 年度），また，一般財団法人言語教育振興財団より研究助成（2020 年度）を受けて実施したものである。

・本研究報告は，國原，吉藤，石原が協議を重ねた上で，次のように執筆を分担した。

Ⅰ：國原，Ⅱ：國原・吉藤，Ⅲ：石原，Ⅳ：國原（全章，検討は三者で行った。）